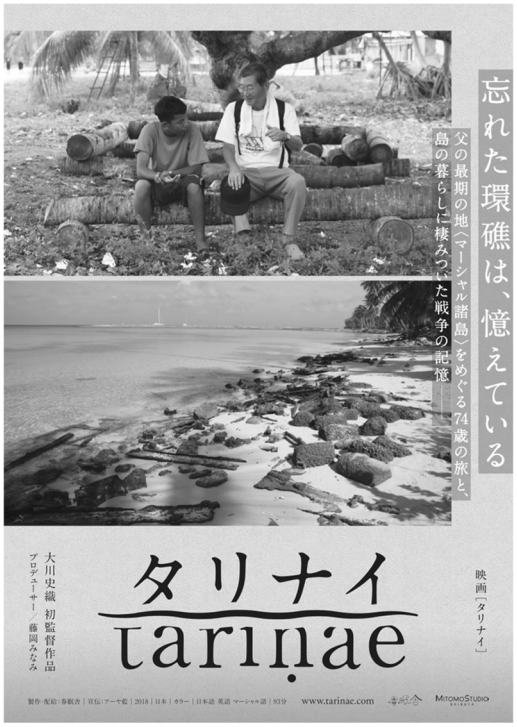
2019 年度秋季大会報告要旨

「満洲の記憶」研究会は、2020 年 2 月 22 日に研究報告の場として、2019 年度秋季大会を一橋大学国立キャンパスにて開催した。今回は、映画監督である大川史織氏を招き、ドキュメンタリー映画『タリナイ』及びその中で取り扱われた佐藤冨五郎日記を翻刻、解説した書籍『マーシャル、父の戦場――ある日本兵の日記をめぐる歴史実践』（みずき書林）についてお話しいただいた。そのほか、佐藤冨五郎日記』の翻刻作業に携わった本研究会の森巧から当該日記の意義について報告した。当大会では約 40 名の方々に参加していただき、多くの示唆に富むコメントがあり、意義深い討論が行われるなど、所期の目的を達成できた。

大川史織（映画『タリナイ』監督・国立公文書館アジア歴史資料センター調査員（非常勤職員））「佐藤冨五郎日記を翻刻して――映画と書籍ができるまで」
森巧（一橋大学大学院社会学研究科博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC2）「佐藤冨五郎日記の意義」

森報告では、初めに近代の日本、中国、韓国などでの歴史研究における日記の取扱について紹介し、その上で佐藤冨五郎日記の意義について簡単に述べた。大川報告では、佐藤冨五郎日記の翻刻事例を中心に、2018 年に公開したドキュメンタリー映画『タリナイ』の制作および同年に出版した書籍『マーシャル、父の戦場――ある日本兵の日記をめぐる歴史実践



ドキュメンタリー映画『タリナイ』
2018 年 9 月 29 日　劇場公開

』（みずき書林）刊行過程を発表した。戦地で亡くなる直前まで綴った日記が、戦後冨五郎氏の遺言どおり家族に届くまでの奇跡と軌跡。唯一の形見である父の日記をご子息の佐藤勉氏が全文読みたいと想いを募らせ、長年続けた努力と行動は、さまざまな運と縁を手繰り寄せた。

70 年前「南洋は満州より近い」といわれていた。筆者と同じくマーシャルに想いを馳せる佐藤勉氏と出会い、多くの協力者に恵まれ、映画と書籍は誕生した。それぞれのメディアの特性を活かし、姉妹編として編むことで、すっかり遠くなってしまった南洋マーシャルを再び近く感じられることを目指した。

1906 年宮城県亘理町生まれの佐藤冨五郎氏は、1943 年 4 月に充員召集を受け、海軍第 64 警備隊が防備するマーシャルのウォッチェ環礁へ配属された。アジア太平洋戦争において、マーシャルでは約 2 万人の日本兵が命を落とした。敗戦までの 1 年 9 ヶ月、補給路を絶たれ、餓えとの闘いを強いられたウォッチェ環礁では、約 4000 人の兵士が自給自足を強いられた。1945 年 4 月、飢えで亡くなる数時間前まで冨五郎氏は日記と遺書を 2 冊の手帳に細かく記した。39 歳の生涯であった。第 64 警備隊日誌の一部や生還者の回顧録としての手記は公開されているが、戦時下のウォッチェ環礁で一兵士が日常を綴った克明な記録は、冨五郎氏の日記以外に確認されていない。

映画は 2015 年に筆者が勉氏と出会い、2016 年 4 月慰霊の旅に同行、撮影した映像を元に約 1 年かけて高校の同級生である藤岡みなみプロデューサーと制作した。

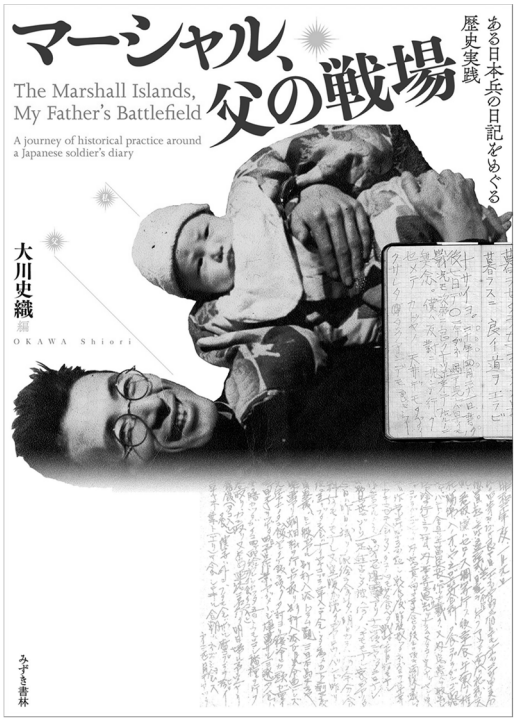
書籍は筆者が 2016 年 11 月に国立公文書館アジア歴史資料センターの調査員となり、報告者の森巧氏が職場の同僚となったことに端を発する。映画『タリナイ』試写版を森氏が鑑賞し、筆者が映画の編集と同時に冨五郎日記の翻刻を手探りで進めていることを知った森氏は、自身が所属する『満州の記憶』研究会の日記翻刻を参考史料として筆者に紹介した。筆者は森氏に背中を押され、自力で全文翻刻を仕上げることに挑み、2017 年 5 月完成した全文翻刻を森氏に見せたところ、冨五郎日記の史料価値は非常に高く、歴史研究者の力を借りることで精度が高い翻刻が可能になると助言を受け、専門の研究が多岐にわたる同僚らに協力を依頼した。その日は金曜日であったことから、翻刻チーム「金曜調査会」を結成。当初は論文集への寄稿を検討していたが、出版企画書を書いたら 1 社目で出版が決まり、それから 1 年、全 242 ページにわたる冨五郎日記を 10 名の力を借りて解読を進めた。肉眼では読みづらく、判読が困難と諦めかけていた文字は、国立民俗歴史博物館教授の三上喜孝先生の協力によって赤外線ビデオカメラで解読した。日記のまわりにインタビュー、論考、エッセイなど多様な補助線を配し、日記翻刻過程も含めて読者が歴史実践できることを心がけた。

1944 年 10 月 1 日の冨五郎日記には、爆撃で壊滅した本隊農園を開墾して高粱（コーリャン）を植え付け、5 日後の 10 月 6 日に芽が出たと記されている。高粱は、マーシャルに自生する植物ではない。戦時下の満洲国奉天から南洋マーシャルのウォッチェ環礁にわたり、のちに生還者が「命の高粱」と呼んだ驚くべき逸話がある。

1943 年 4 月、満鉄職員の北原百次郎にも充員召集の令状が届いた。百次郎氏は、大和区雪見町の満鉄社宅で妻と 3 人の子供と暮らしていた。冨五郎氏と百次郎氏の共通点は、海軍歴があり、農家出身だが長男ではなく、3 人の子供の父であり、家族を想う気持ちを日記や手紙に認めていた点にある。

1943 年 7 月 10 日、ふたりは「冲鷹」に乗船し、横須賀を発った。秋になり、百次郎氏の妻は、配給として配られた高粱の種を慰問袋に入れて送った。マーシャルの制空海権が奪われ、補給路が断たれる直前であった。1944 年 9 月、百次郎氏は空襲で直撃弾を受け 33 歳で命を落とした。亡くなるまでの約 1 年半、37 通の手紙が軍事郵便で奉天とマーシャルを行き交った。百次郎氏が亡くなる直前に蒔いた高粱の実は、マーシャルで実をつけ、飢えゆく兵士の命を救ったことを妻は戦後生還者から耳にしたと書き遺している。

2018 年冬、筆者は第 64 警備隊作成の「功績整理簿」功績特殊事項欄に「高粱ノ種子ヲ本島に伝ヒ」と百次郎氏の「功績」が記されていることを防衛省の公開史料で発見した。海軍の用箋に書かれたその小さな文字を見つめながら、「ガ死ダ食モノナシ」と冨五郎氏が鉛筆書きをペンでなぞり、斜めに強く記した文字が浮かんでいた。



大川史織編『マーシャル、父の戦場――ある日本兵の日記をめぐる歴史実践』（みずき書林、2018 年）